

## 介護を担う子ども（ヤングケアラー）研究に関する文献検討

青木由美恵

キーワード：ヤングケアラー，介護者支援，家族支援，文献検討

### I. 諸言

超高齢化が進み、2015年の時点の全国の65歳以上の高齢者のうち、認知症有病者は約517～525万人、有病率推定値は15.7～16.0%と推計されている<sup>1)</sup>。また、2012年の軽度認知障害（Mild Cognitive Impairment, 以下MCI）も有病者数は約400万人、有病率推定値が13.0%とされている<sup>2)</sup>。このような中で、家族における介護の問題は、これまでも核家族化の進行や、高齢者が高齢者を介護する「老老介護」や、認知症の方が認知症の方を介護する「認認介護」という言葉で語られてきた。一方、認知症は高齢者だけに発症するものではなく、全国における若年性認知症者数においても3.78万人と推定され、当事者と家族が抱える問題もクローズアップされている<sup>3)</sup>。国民生活基礎調査<sup>4)</sup>における結果では、要介護者が40～64歳だと介護者が40歳未満のケースは7.8%となっている。仮に、親が50代で病気になると10～20代の子どもが介護者になるケースも想定できる。

ひとり親家庭は、2011年の推計で146万世帯あり、1990年からの約20年間で1.5倍に増加している<sup>5)</sup>。しかも、子ども以外の同居者がいる母子世帯は38.8%となっており「親と同居」が28.5%と最も多く、父子世帯60.6%では「親と同居」が50.3%と最も多くなっている<sup>5)</sup>。この背景には、離婚や死別が考えられるが、晩婚化や35歳以上の初産の増加、少子化も重なると、親や祖父母に介護が必要になった場合、賃労働で忙しい親に代わり家族間での介護役割の調整が難しいと、子どもがその役割をサポートしたり引き受けたりする状況も生じる。

このような家族のケアを担う子どもたち（ヤングケアラー：young carer, 以下YC）は、イギリスでは

1970年代から取り組まれたコミュニティケア改革の流れの中で注目され、他国に先駆けて1980年代後半から調査や支援、行政面での対応がされてきた。ヤングケアラーとは、この分野の研究の第一人者である<sup>6)</sup> Becker<sup>7)</sup>が「家族メンバーの介護や援助、サポートを行なっている（あるいは行うことになっている）18歳未満の子ども」と定義している。イギリスやオーストラリアのヤングケアラーに関しては、日本にもいくつかの報告がされてきた<sup>8-12)</sup>。

日本では、家族の介護を担うのは中高年者であると捉えられており、介護をする子どもがいても「よくできた子」とみられ、未成年の子どもが家族の介護を担うことそのものへの関心は薄い。さらに、子どもがその介護による負担から子どもらしい時間を過ごすことや必要な支援を受けることができずにいるということは、見過ごされがちである。しかし、近年は日本においても介護を担う子どもに関する調査結果がいくつか発表されるようになってきた。

### II. 研究目的

日本におけるヤングケアラーに関する研究の動向を明らかにする。

### III. 用語の定義

「子ども」：18歳未満<sup>13)</sup>

「ヤングケアラー」：家族に病気や障害のためにケアを要する人がいる場合、ケアの責任を引き受けて、家事や家族の世話、懷疑、感情面のサポートなどを行っている18歳未満の子ども。

なお、分析対象文献において使用されている「介護を担う子ども」や「親をケアする子ども」などの表現は、そのままの記載とする。

---

Yumie Aoki

関東学院大学看護学部

## IV. 方法

### 1. 研究期間

2015年8月～12月

### 2. 対象文献

データベース検索は2015年8月16日～20日に実施し、検索対象期間は全て1985年～2015年とした。検索方法は、「雪だるま式検索」(snowballing method)を採用し、文献データベースを中心とした検索が終了した後、入手文献の引用文献や研究疑問に関係が深い専門雑誌や著者などの情報をもとに、さらに文献検索を進めた。

医中誌Web (Ver.5) を用い、キーワードは「ヤングケアラー」、「若年介護者」、「介護者」and「未成年者」とし、シソーラス用語も活用して看護学分野に限らずに検索を行った。検索結果は、「ヤングケアラー」5件、「若年介護者」2件、「介護者」and「未成年者」2件の合計9件であった。また、CiNii Articlesを用いて、キーワードを「ヤングケアラー」、「若者介護者」、「介護者」and「孫」、「祖父母」and「介護」とし、シソーラス用語も活用して検索した。結果は、「ヤングケアラー」20件、「若者介護者」1件、「介護者」and「孫」11件、「祖父母」and「介護」20件の合計52件であった。今回、査読を経ていることが期待される原著論文に限定して検索しなかった理由は、研究疑問に関係する解説・総説、会議録も重要な情報源が含まれている可能性があり、まずはこれらを含めて収集し、対象文献の選定を進めることとした為である。

さらに、データベース検索で抽出した文献の引用文献リストの情報をもとにCiNii Articlesによる参考文献／被引用文献の検索や、著者検索、雑誌の目視 (hand search) により、必要な文献を収集した。

文献の選定は、入手できなかった2文献を除き、全ての題目や要旨を含む書誌事項を概観した。日本におけるヤングケアラー研究の現状を把握する必要がある為、イギリスを中心とした海外におけるヤングケアラーの現状や支援等についてのみ報告する文献は除外し、言語は日本語に限った。

### 3. 分析方法

各文献の、主題、研究目的、ヤングケアラーの定義／年齢、方法、結果について整理した。

## V. 結果

分析対象とした文献は8文献であった。出版年順に対象文献をまとめたものを表1に示したが、個別の概要についても後述する。以下、本文中で示すIDは表1のID番号に対応したものである。

まず、ヤングケアラーの定義／年齢は、8文献中7文献において先行文献の引用から定義していた。しかし、その年齢は18歳未満とそれ以外のものとが混在していた。

次に、文献の引用・被引用の関係をみると、イギリスで実施されたヤングケアラー調査を詳細に報告している三富<sup>21), 22)</sup> は、初期の重要文献として5文献 (ID1, 4, 7, 8, 9) において引用され、「Young Carers」の用語を論文タイトルにも使用した柴崎<sup>11)</sup> も、4文献 (ID4, 7, 8, 9) において引用されていた。

そして、ヤングケアラーへの支援では、その発見のために学校が果たす役割の大きさと、背景や主な家庭内での役割の実態からその家族全体への支援の必要性を指摘した (ID8)。しかし、ケアを担う子どもへの支援方法は確立していず、個々の医療福祉専門職は現場で試行錯誤していることを指摘し (ID7)、子どもの「ケアする権利」、「ケアしない権利」は、ケアに関わる成人の権利よりも守られにくい構造にあり、ヤングケアラーへの承認と支援の重要性 (ID3) が示された。また、CODA (Children of Deaf Adults: 聴覚障害者の親をもつ健聴の子どもたち、以下CODA) は聾者と聴者の文化のはざまに育ち、青年期の自己の確立には大きな困難が生じることから、生涯発達の観点から一貫した心理・教育的支援が必要であることが指摘され (ID5)、特に通訳役割に関する葛藤が長期にわたる例には支援が必要 (ID4) であると指摘された。

最後に、各文献が示した研究の限界と今後の課題は、まず研究方法による影響が指摘されていた。質的研究においては、子どもが聞き手に「どのように」語るか (ID1)、親が同席しているインタビューの場がどのように作用したのか (ID1) があった。また、後ろ向き研究による方法的限界として、記憶が事実と一致した情報であるかといった問題が指摘されていた (ID5)。研究方法における今後の課題としては、方法の複合化、時間経過に考慮した二時点パネル調査の活用 (ID6) が挙げられていた。今後明らかにすべき課題としては、質的研究による介護を担う子どもの生活実態の調査 (ID6)、介護を担う子どもの状況認識やケアを引き受ける理由 (ID1, 6)、ケア役割との葛藤 (ID1) と対

表1 ヤングケアラーに関する研究の概要

ID	著者 (発行年)	目的	ヤングケアラー の定義/ 年齢	対象者数/対象者の特徴	標準抽出デザイン/ データ収集方法	分析方法	結果
1	土屋美 <sup>14)</sup> (2006)	病氣/障害の親のもとで育つ子ども の経験について記述する	あり 引用(Thomas et al.2003) /18歳以下	3名 親がALSを 発症した時に 18歳未満で あった子ども	作為抽出法(判断的抽出法) 追跡調査 半構造化面接法	逐語録を作成し、便宜 先行見出しを付け、先 行研究を参照し、小カテ ゴリーを抽出	ケアをめぐる経験として、「肯定的影響」「機会の制限 /時間的制約」「ケア役割への期待」「ライフコース選 択への影響」「将来的な不安」という4つのカテゴリーが見出 された。
2	森田久美子 <sup>15)</sup> (2010)	メンタルヘルス問題の親を持つ 子どもへの経験を明らかにする	あり 引用(Becker, 2000) /18歳未満	1名 メンタルヘルス問題の親をもち、3歳 の時に初めてケア役割を担った25歳 の女性	作為抽出法(判断的抽出法) 非構造化面接法(2~3時間× 3回)	逐語録にし、ナラティブ 分析を用いて、ましまし のある内容ごとに小見出 しを付けて関連を分析 し、カテゴリーを抽出	メンタルヘルス問題を持つ親と子どもとの関係として、 「ケア役割に巻き込まれる」「友情・社会関係の機会の 制限」「親のメンタルヘルス問題」をめぐって経験し、ラ イフコースの選択」という4つのカテゴリーが見出され た。
3	澁谷智子 <sup>16)</sup> (2012)	親の病気を10代で経験した人の 語り进行分析し、家族の持つ資源 と家族役割の調整、子供のケア 負担を軽減する要因等を考察す る	あり 引用(Becker 2000) /18歳未満	3名 ヤングケアリング経験をもつ2名(A:40 代女性、B:30代女性)と姉の母親を自 分はケアをしたかったという認識をもつ1名 (C:30代男性)	作為抽出法(判断的抽出法) インタビュー A, B:90~120分、C:50分	事例研究	子どもへのケア負担を軽減させている要因は、①親の「で きること」、②「その家庭のケアを実際に行う人の存 在」、③病氣や障害のある人と子どもとの物理的な距離 にあり、④親の意向であった。子どもが「ケアをする権利・し ない権利」については、特に②のケアスににおいて権利 が保障されにくいことを指摘した。
4	中津真美 <sup>16)</sup> 廣田栄子 <sup>17)</sup> (2012)	通訳経験を通して形成された CODAの聴覚障害者の親に 対する認識と、その愛育過程を明 らかにする	あり 引用(Dearden & Becke2004) /年齢の言及な し	CODA 25名と親19名 CODA(女性15名、男性10名)と、 聴覚障害者の親(母親14名、父親5名)、 対象者の15組32名は親子が対応し、 いずれも実子関係、CODAの平均年 齢29.3歳、親の平均年齢56.0歳。	作為抽出法(判断的抽出法) 機械法を用いてある地域 の聴覚障害者協会及び CODAの自助グループを 通じて協力依頼し、その他 の聴覚障害関係者等の紹介 による募集	修正版(MGTA)手法に より質的に分析	CODAが親との関係性において抱いた認識は、児童期 では無意識に親を離れ、青年期では通訳役割に葛藤 を抱くが、成人期では親を理解し受容した。一方、親 は児童期にはCODAの通訳を頼る傾向から、青年期に は自立を志向する姿勢であった。子どもが親の心理的 修復に至る変容過程が示され、CODAが親の受容に至 る経緯には個人差があった。
5	中津真美 <sup>17)</sup> 廣田栄子 <sup>18)</sup> (2013)	CODAの成長に伴う心理状況 の変容と聴覚障害をもつ親と の心理的な相互性について検討 する	なし	CODA 21名と親19名 親への通訳経験のあるCODA(男性 9名、女性12名)と、聴覚障害者の親(父 親4名、母親15名)、 対象者の15組31名は親子が対応し、 いずれも実子関係、CODAの平均年 齢28.6歳、親の平均年齢56.2歳。	半構造化面接調査(各1時間)	探索的因子分析(主 成分法、因子分析) さらには各因子得点を比較 し、対応のあるt検定を用 いて統計学的に検定	CODAの成長に伴う心理状況は、青年期では不満と 戸惑いを示し、成人期には悠長感と探感に受容 するが、充足感については親ほどではない。CODAの大 きな困難における支援は、青年期の確立から一 貫した心理的・教育的支援が必要性が明らかになった。
6	森田久美子 <sup>18)</sup> (2013)	介護を担う子どもに関する研究 の動向を展望し、精神障害の親 を介護する子どもへの研究の今後 の展開について示唆を得る	あり 引用(Becker, 2000) /18歳未満	39文献 (洋文献31件、 和文献8件)	文獻探索の方法に ついては明記なし	先ずイギリスの 介護を担う子どもに関する 先行研究から知見を整理 し、介護を担う子どもにも 関する研究で得られた 知見を整理	イギリスの介護を担う子どもに関する研究は、コミュニ ティケア政策の下、少数の事例調査から始まった。量的 調査においてイギリス全土で約17万5千人存在している 子どもが特定された。子どもに介護役割を担わせる原因、 子どもが担う介護作業や責任、介護が子供に与える影 響などについて質的調査を通じて、実態が徐々に明らか にされ、介護の新たな側面の解明も行われており、今 後の課題が示された。
7	澁谷智子 <sup>19)</sup> (2014)	医療福祉専門職のケアをする子 どもの存在とヤングケアラーの 実践をどのように認識し、どう 支援しようとしていっているのかを明 らかにする。	あり 引用(Becker, 2000) /18歳以下	859名 東京都医療福祉社会事業協会(東京 MSW)の全会員	作為抽出法(判断的抽出法) 郵送による無記名式自記式 アンケート調査	量的データは、SPSS20 を用いて分析 自由記述は、全書き 出した後、共通概念を 抽出し、それらを分類 して分析	約3人に1人が子どもがケアをしているのとは感じ たこと、子どもがしているケア内容として、量的 調査においてイギリス全土で約17万5千人存在している 子どもが特定された。子どもに介護役割を担わせる原因、 子どもが担う介護作業や責任、介護が子供に与える影 響などについて質的調査を通じて、実態が徐々に明らか にされ、介護の新たな側面の解明も行われており、今 後の課題が示された。
8	北山沙和子 <sup>20)</sup> 石倉勉 <sup>20)</sup> (2015)	家族へのケアの担い手となっ ている子どもの実態把握と、彼ら が抱える問題について明らかにす る	あり /18歳未満	495名 A:県B市(人口約27万人)と、C:県D市 (人口約20万人)の全公立中学校39校 に勤務する特別学級も含む担任教員	作為抽出法(判断的抽出法) 郵送による無記名式自記式 アンケート調査を各校で取 りまとめ返送	明確な記述なし	学校としての回収率46.1%、担任教員の回収率34.7%、 有効回答率28.9%、ヤングケアラーと思われる生徒52名 (存在率1.2%)であった。男より女が多く、背景には ひとり親家庭、保護者の外国籍、家族の誰かに障害が ある、長期入院中であるなどの生活上の困難があった。

処 (ID 6), 介護を担う子どもの存在規模 (ID 6, 8), 量的質的な介護実態 (ID 6), 性別 (ID 1, 4) および年齢, 長子か末子か (ID 4), 小学生以前と中学卒業後の状況 (ID 8), 要介護者である親と介護者である子どもの関係性 (ID 1) や互いの経験の共通点や相違点 (ID 2), 必要なサービスへのアクセスを困難にする要因やそのメカニズム (ID 6), 発達やライフサイクルにおける困難 (ID 8) が挙げられた。さらに, 先行研究が充実しているイギリスと日本の家族形態などの違いによるヤングケアリングへの影響の分析の必要性 (ID 3) や, 介護を担う子どもの権利の明確化とその実現に向けた施策の在り方 (ID 6) も指摘されていた。

## VI. 考察

### 1. 研究年代と研究方法

2006年の土屋<sup>14)</sup>の研究では, 親がALS (筋萎縮性側索硬化症) を発症した時に18歳未満であった3名の子どもの語りを分析している。2010年には森田<sup>15)</sup>によりメンタルヘルス問題の親を持つ一名の子どもの語りがナラティブ分析され, その後の澁谷<sup>6)</sup> および中津ら<sup>16), 17)</sup> によるCODAとその親の経験の語りを分析した研究へと続く。いずれも対象者は1名~25名という少数事例の質的研究であるが, 澁谷<sup>6)</sup> も指摘しているように, 日本における研究知見とイギリスにおける先行研究との比較や対比とともに, イギリスにおいて指摘されてきた状況と同様の状況が日本においてもみられることを明らかにした意義は大きい。事例研究は, 「個別, 家族, 集団, 施設, コミュニティ, その他の社会的単位といった, 単一の存在や少数の存在についての徹底的な調査研究」<sup>23)</sup> と言われるように, 個別事例に関わる豊富な情報を理解し, その現象から何らかの共通項を見出そうとするものである。本稿で分析対象としている2012年までに実施された研究により, 日本においてもヤングケアラーの存在と介護実態が徐々に明らかになり, 個別の事例を中心に, 子どもたちに介護を担わせる要因, 子どもたちが担う介護の内容や責任, 介護がもたらす影響, 介護についての認識などの蓄積がされてきている。そして, 以降の量的調査の必要性の認識へとつながったものと考えられる。

2013年になると森田<sup>18)</sup>により国内外のヤングケアラーに関する研究の動向の報告がされている。英語文献31件, 日本語文献8件の合計39文献を分析対象としており, そのうち35文献がイギリスにおける先行研究である。2013年時点の日英におけるヤングケアラーに関する

研究の蓄積量の差は明らかであるが, 分析対象文献の整理から研究内容の到達点を踏まえた今後の課題が提示されていた。

2014年に澁谷<sup>19)</sup>により報告された医療福祉専門職859名を対象としたアンケート調査は, 2013年1月~3月にデータ収集されたものの分析である。翌2015年には北山ら<sup>20)</sup>が公立中学校に勤務する担任教師495名を対象に行った調査結果を報告しているが, この調査データは2011年7月~8月に収集されている。これらが日本では初めてのヤングケアラーに関する量的な実態調査となっており, 日本におけるヤングケアラーの存在率がどの程度であるのかという実態把握は始まったばかりといえ, 当事者である子どもの視点からの把握や詳細な家庭環境についての把握の難しさが推察される。

引用・被引用に関する関係では, この分野の先駆的取り組みから, イギリスで既に明らかとなっている知見と日本におけるヤングケアラーの状況とに重なる部分や, 異なる部分で新たな側面と考えられる部分などの検討に重要な役割を果たしている。

さらに本稿で分析対象とした8文献は, 相互に引用され, 特にヤングケアラーとなる要因や介護の内容, 介護がもたらす影響, 介護についての認識などの探求がされていた。これは引用文献が偏っているのではなく, 報告された文献数が少ない時期の為網羅されているのだと見ることが出来る。初めて報告された文献や発行年が近い文献も引用することは, 本研究分野における国内の研究の蓄積が始まったばかりの現状においては, さらなる研究課題を明確にしてリサーチクエスションに応じた研究方法を選択するために, 重要な過程と推測される。

### 2. 認知症の親を介護する子どもの研究

今回, 文献対象とした日本におけるヤングケアラー研究の文献の中には, 認知症の親や祖父母を介護する子どもについては含まれなかった。しかし, 現在の社会状況の変化から, 認知症の親や祖父母を介護するヤングケアラーの存在は十分に考えられる。イギリスにおいて介護する子どもたちは, 恒常的に, 相当量のケアや重要なケアに携わり, ふつうは大人がするとされているようなレベルの責任を引き受けている<sup>11)</sup>。今後は, 認知症ケア分野のイギリスにおけるヤングケアラーの実態や先駆的な取り組み知見の整理や, 日本における実態把握に向けた先行研究の整理が必要である。具体的には, 認知症高齢者を介護する孫の存在や若年性認知症の親を介護する子どもの存在が, 認知症の家族介護者について取りまとめ

られた先行研究の中に、ヤングケアラーという概念を用いられることなく記されているものなどの探索から始めることも、必要であろう。

## Ⅶ. 結論

今回の文献検討から、日本におけるヤングケアラー研究は少数事例の分析によりその実態が明らかにされてきており、その存在率も教育機関や医療福祉専門職の所属機関を通して把握され始めたところであった。しかし、その実態調査についての難しさも示唆された。

超高齢社会における認知症患者の増加の中で、認知症の親や祖父母を介護するヤングケアラーの実態についての知見は見つけられなかった。このことは、今後のこの分野の介護者研究の先行文献の中からケアを引き受ける18歳未満の子どもに関するものを検索することや、リサーチクエスションに応じた研究方法を選択しながらその実態把握に努める必要があることが、日本におけるヤングケアラー研究の一部としても必要であると推測された。

本研究は、関東学院大学看護学研究所2015年度助成を受けて実施した研究の一部である。

## 引用文献

- 1) 二宮 利治：日本における認知症の高齢者人口の将来推計に関する研究，平成26年度厚生労働科学研究費補助金（厚生労働科学特別研究事業），12，総括研究報告書，2015。
- 2) 朝田隆：都市部における認知症有病率と認知症の生活機能障害への対応，平成23年～平成24年度総合研究報告書，厚生労働科学研究費補助金事業認知症対策総合研究事業，8-9，つくば，2013。
- 3) 朝田隆：若年性認知症の実態と対応の基盤整備に関する研究，平成20年度総括・分担研究報告書，厚生労働科学研究費補助金長寿科学総合研究事業，つくば，2008。
- 4) 厚生労働省：平成26年グラフでみる世帯の状況 国民生活基礎調査（平成25年）の結果から，52，大臣官房統計情報部，東京，2014。
- 5) 厚生労働省：平成23年度 全国母子世帯等調査結果報告，2，6，雇用均等・児童家庭局家庭福祉課 母子家庭等自立支援室，東京，2012。
- 6) 澁谷智子：子どもがケアを担うとき－ヤングケアラーになった人/ならなかった人の語りと理論的考察，理論と動態，5，2-23，2012。
- 7) Becker, Saul: Young carers, Martin Davies ed. The Blackwell encyclopedia of social work, 378, Oxford Blackwell, 2000.
- 8) 福知栄子：英国における教育ソーシャルワーカーの新たな役割，岡山県立大学保健福祉学部紀要，3，67-77，1996。
- 9) 三富紀敬：イギリスの在宅介護を担う児童，静岡大学経済研究，2（1），1-65，1997。
- 10) 三富紀敬：介護を担う子どもと支援事業，静岡大学経済研究，12（3），23-73，2008。
- 11) 柴崎智恵子：家族ケアを担う児童の生活に関する基礎的研究：イギリスの“Young Carers”調査報告書を中心に，人間福祉研究，8，125-143，2006。
- 12) 木下康仁：特集 介護者支援の国際比較：要介護者と家族を支える取り組みの多様性 オーストラリアのケアラー（介護者）支援，海外社会保障研究，184，57-70，2013。
- 13) 公益財団法人日本ユニセフ協会（Unicef），よくあるご質問 子どもの権利条約，2016年1月22日，[http://www.unicef.or.jp/about\\_unicef/about\\_rig.html](http://www.unicef.or.jp/about_unicef/about_rig.html)
- 14) 土屋葉：「障害」の傍らで－ALS患者を親に持つ子どもの経験，障害学研究，2，99-123，2006。
- 15) 森田久美子：メンタルヘルス問題の親を持つ子どもの経験-不安障害の親をケアする青年のライフストーリー，立正社会福祉研究，12（1），1-10，2010。
- 16) 中津真美，廣田栄子：聴覚障害の親をもつ健聴の子ども（CODA）の通訳役割に関する親子の認識と変容，音声言語医学，53，219-228，2012。
- 17) 中津真美，廣田栄子：聴覚障害の親をもつ健聴の子ども（CODA）の通訳場面に抱く心理状態と変容，AUDIOLOGY JAPAN，56（3），249-257，2013。
- 18) 森田久美子：精神障害の親を介護する子どもに関する研究の動向と展望，立正大学社会福祉研究所年報，15，89-106，2013。
- 19) 澁谷智子：ヤングケアラーに対する医療福祉専門職の認識－東京都医療社会事業協会会員へのアンケート調査の分析から，社会福祉学，54（4），70-81，2014。
- 20) 北山沙和子，石倉健二：ヤングケアラーについての実態調査－過剰な家庭内役割を担う中学生，学校教育学研究，27，25-29，2015。
- 21) 三富紀敬：イギリスの在宅介護者，394-481，ミネル

ヴァ書房, 東京, 2000.  
22) 三富紀敬: イギリスのコミュニティと介護者, 394-481, ミネルヴァ書房, 東京, 2008.

23) Polit D. F. & Beck C. T. (2004) / 近藤潤子監訳 (2010). 看護研究－原理と方法 (第2版), 265, 医学書院, 東京.